



兵庫県但東町のチューリップ祭り（本文中に関連記事があります）

目次 contents

・NPO 法人「都心界限まちづくりネット」の設立……………	2
・温泉施設のリノベーション2題……………	4
・痴呆性高齢者グループホームの挑戦（その2）……………	6
・きんぎょう……………	8
・街あそび「なにわ探検クルーズ」……………	10
・尼崎21世紀の森づくり協議会で ワークショップ・フォーラムを開催しました……………	11
・「手の知」を通して～翹づくり職人の「技」～……………	12
・メディア・ウォッチ……………	13
・まちかど……………	14

NPO 法人「都心界限まちづくりネット」の設立

〔京都事務所／石本 幸良〕

京都の姉小路界限からの新しい報告です。都心界限でまちづくり活動を展開する法的な主体としてNPO法人を設立しましたので、法人の事務局長として報告させていただきます。

(1) 都心界限での大きなうねり

姉小路界限では平成7年の夏のマンション建設問題に端を発して、10月に「姉小路界限を考える会」を設立しました。その後、界限において様々なまちづくり活動やイベントを実施しています。平成11年1月からの「地域共生の土地利用検討会」では住民・事業者・行政のパートナーシップ型まちづくりを実践し、平成14年8月末に「アーバネックス三条」が完成しました。界限での市民活動を列記すれば順調に進んでいるようにみえますが、絶えず大きなうねりに翻弄され、苦しみつつ進んできました。

上記の検討会での計画づくりが終盤にさしかかった頃、通りをはさんで西側で高さ31m、長さ52mの新たなマンション建設計画が、また、御池通では高さ45m、長さ86mの超巨大マンション計画が持ち上がりました。検討会で丹念に積み重ねてきた議論が、そのプロセスが、伝わっていかない、広がっていかないジレンマに、住民たちはいらだちました。



アーバネックス三条から見る巨大マンション

建築協定の締結

マンション建設計画は、平成12年4月にまとめた姉小路界限町式目（平成版）（ニューズレター113号：2002年5月発行で紹介）の具体化に向け、平成13年1月より建築協定締結に向けて活動を開始した矢先に持ち上がりました。この問題が発端となり、当初、姉小路界限を考える会の活動母体である姉菊屋町単独で進めていた建築協定の動きが、一気に界限の13町内会にも広がり、協定者約100名、協定区域面積2haにも及ぶ広範囲な建築協定として平成14年7月に発効しています。

「御池通シンボルロード市民の会」の発足

また、御池通での前述のマンション建設計画が契機となり、平成13年9月、御池通沿道の企業と周辺住民による「御池通シンボルロード市民の会」を発足させました。

対話を通じたまちの豊かな変化

まちは変わるものです。それが私たち住民の意思によるものにせよ、そうではないにせよ、変化を避けることはできないのかもしれませんが、しかし、私たちはその変化が少なくとも、まちの人の日々の営みと呼应したものであってほしいと願わずにはられません。

「アーバネックス三条」もまた、そうした変化の一つです。私たちが目指すべきは、変化を拒むことなく、むしろ、変化によって新しく導入される人やモノがまちと対話し、対話を通じてまちがより豊かになる方向へと、変化を誘導することにあると考え、取り組んできました。

(2) NPO 法人の設立

このようなまちの危機的状況に接し、住民や地元企業から「まちづくりを自らの手で」とする大きなうねりが生まれ、都心界隈において、それらを含めながら連携協力し、行政との協働を図ることのできる組織の必要性が確認されました。こうして「姉小路界隈を考える会」のメンバーが中心となり、平成10年6月に発足していた連絡会「都心界隈まちづくりネット」は、特定非営利活動法人として再スタートをきることとなりました。平成15年1月16日付けで法人は成立し、理事長には老舗旅館の蔦家旅館社長西村勝氏に就任して頂きました。

法人案内パンフレットに設立への思いを簡潔に整理していますので、ご紹介します。

自己決定の時代～都市は本来、そこに住む人、なりわいを営む人の総意によってつくられるべきではないか。そして京都という都市の美しさも、またその総意をなぞるように醸し出されるものではないか。

都心界隈まちづくりネットは、こうした思いを集め、企業や行政との協働のもと、「まちの人の手で、まちの人の思う、まちの人のためのまちづくり」を実現することを目的として平成15年1月に設立いたしました。都心界隈まちづくりネットでは、地域の現状やまちづくりの取組の情報を随時発信していくことで、京都の、そして全国の住民主体のまちづくりの発展に寄与したいと考えています。

(3) 設立記念シンポジウムの開催

NPO法人ではその設立を記念して平成15年3月2日に「美しい都市・京都・都心界隈からの



設立記念シンポジウム

発信」と題してシンポジウムを開催しました。滋賀大学長の宮本憲一先生と京都大学名誉教授の三村浩史先生に講演を頂き、その後、両講師と法人理事長による鼎談を行いました。

シンポジウムでは、宮本先生から戦後の都市政策の失敗点があげられ、住民主体のまちづくりの大切さを強調、「NPO法人は行政の下請けになってはならない、自立性と独自性を持ちながら、行政とのパートナーシップを進めてほしい」との弁。また三村先生からは、老舗や寺や工房が並び、職住が共存する姉小路界隈の特性を指摘しながら、NPO法人の今後の活動に対してエールが送られました。

(4) 当面の法人活動の概要

NPO法人は15年度からの具体的な活動として、「歴史的都心街区における自律・共生のまち運営」の確立をめざして、地区計画の導入に向けての活動と、美しい京都のシンボルロードに相応しい御池通の景観とにぎわいづくりに向けての提案活動を行ってまいりますので、ご支援よろしく申し上げます。

(法人についての問い合わせは以下にお願いします：isimoto@sweet.ocn.ne.jp 石本)

温泉施設のリノベーション2題

〔大阪事務所／鮒子田 稔理〕

これまで、アルバックでお手伝いしてきた温泉施設は設計中も含めると、20件近くになりました。

今回は、その中で、この春リニューアルした2つの温泉をご紹介します。

さるびの レストラン客席・厨房の増築

平成11年にオープンした三重県大山田村の「さるびの」では、年間約30万近くの人が訪れ、村に賑わいをもたらしています。

この度かねてよりの課題のひとつであった、厨房とレストラン「くれは」客席の増築を行いました。当初の計画では、10万人の入込数を見込んでいましたが、実際には、その3倍の人が訪れ、そのうち約4割の人がレストラン「くれは」または軽食などを提供する「セルフ」を利用していました。その結果レストランはいつも満杯でした。また、調理の方も厨房が手狭なことで、作業が思うようにいかず不便な思いをしておられました。増築に伴い、厨房をこれまでの約3倍の広さにし、その他に1坪型の冷凍庫・冷蔵庫やプロパン庫を置くサービスヤード約50㎡も設置しました。客席は新たに35席のスペースを増築し、うち10席はパーティションで個室に区切ることができます。特注の大きな木のテーブルも置いていただきました。

「さるびの」の最初の設計の折には、まだ調理人の方や具体的なメニュー等は決まっていなかった中での設計でしたが、今回は、4名の調理人の方やフロアで働く従業員の方のご意見を聞き、何度も変更を重ねながら設計を進めて

いきました。

今回の工事のもうひとつのポイントは、工事期間5ヶ月の中で、温泉はもちろんのこと、レストラン部門の休業を極力少なくするという点でした。レストラン用と軽食を扱うセルフ用の仮設営業のプレハブ2つを設置しましたが、機器の移動や接続のため、どうしても使用できない期間がでてきます。休館日をにらみながら、工期をやりくりし、なんとか「くれは」と「セルフ」が同時に休業するのを防ぐことができました。

リニューアルオープンの3月21日には、イベントも行われ、盛況となりました。また、伊賀牛のシチューやハンバーグ、ラーメンなど新メニューも登場しています。

但東町シルク温泉 第2泉源配湯とエステ棟の増築

次に紹介する平成6年にオープンした兵庫県但東町のシルク温泉も年間約30万近くの人が訪れています。

オープン当初はあまりの盛況ぶりに「但東町に行列ができた!」と驚きの声をあげた町民の方もおられましたが、それも今ではあたりまえの光景となっています。

シルク温泉のもともとの泉源は湧出量が少なく、30万人の入浴客に対応するには限界状態が続いていました。温泉の安定供給のため、第2泉源の掘削を行い、平成14年春に263リットル/分の豊富な温泉が湧出しました。そして、この度、第2泉源の配湯工事が完了し、露天風呂



毎年5月に飾られる「さるびの」の鯉のぼり



レストラン「くれは」の客席

には第1泉源、浴室内の大浴槽には第2泉源というように使い分けをして、2つの温泉が楽しめるようになりました。

また、お風呂あがりにリラックスできる新施設としてエステ棟が4月10日にオープンしました。エステは昨年5月より試験的に行っていましたが、好評だったため本格的に行うことになり、渡り廊下をはさんだ中庭部分に別棟で建てることになりました。渡り廊下を含め、35m²という小さなスペースですが、顔、足、全身のエステを同時に行うことができるように3つのベッドスペースと事務スペースを設けました。そして、機器を同時に使用することも考え、電気容量も大きくし、コンセントをたくさん設置しました。

2つの温泉は、どちらもたくさんの人に好評を博していますが、いくつかの共通点があります。まず1つは、温泉そのものの質、どちらも重曹泉で、アルカリ度を示すPH値が高く、ぬるっとした感触があり肌に滑らかで、お風呂あがりにはすべすべになります。

もうひとつは、従業員や地元の人、あるいは役場の方々が力や知恵を出し合って、商品開発やイベントなどたゆまぬ努力を行っているという点です。

新特産品や新メニュー開発

「さるびの」では、温泉を使った温泉化粧水や米の粉を使用したパンなどを次々と発売しています。また、鳥羽市神島（三島由紀夫の小説「潮騒」の舞台となった「歌島」のモデルになっ



温泉を使った温泉化粧水

た島)との交流を図り、浜茹でした蛸なども販売し、またレストランでは神島の食材を使った神島御前も新メニューとして加えられました。さらにイベントでは神島から伊勢えびやグレなどの鮮魚も運ばれて販売され、新鮮な野菜やこんにゃくといった大山田村産品に色を添えています。

一方、「シルク温泉」では、加工施設でつくった青大豆味噌や、新鮮な野菜など素朴な味を地道に提供する他にラウンジでパンを焼き、販売するなどリピーターにも常に新鮮さを味わってもらえるよう努力を怠りません。

また、但東町で毎年4月中旬～4月下旬にかけて行われるチューリップ祭りは、100万本のチューリップが咲き、たくさんの方の目を楽しませています。チューリップによるフラワーアートが毎年話題のデザインで登場します。今年は鉄腕アトムが10万本のチューリップによって壮大に描かれていました。

「さるびの」や「シルク温泉」をはじめとして、我々が設計をお手伝いした温泉施設は、いずれも利用者や従業員など様々なひとの手によって着実に育てあげられています。今後も皆に愛される施設であり続けるためにサポートを続けていきたいと思えます。

そうぞの森「さるびの」ホームページ

<http://www.sarubino.com/>

但東シルクロード観光協会ホームページ

<http://www.tantosilk.gr.jp/>



大山田特産生芋手づくりこんにゃく

痴呆性高齢者グループホームの挑戦（その2）

〔大阪事務所／大河内 雅司〕

株式会社やNPOの積極的なグループホーム参入

平成12年度の介護保険第1期において、グループホームの量的不足を解決するために、社会福祉法人、医療法人に加えて株式会社やNPOの事業参入が可能になりました。このこともあって、京都府及び京都市の現状では、株式会社やNPOの運営がグループホーム全体の5割弱を占めるまでになっています（平成15年2月、(財)京都SKYセンター資料）。

前号では社会福祉法人が運営する宇治市内のグループホームを紹介しました。そこで今回は、宇治市内の株式会社運営のグループホームを取り上げ、直面している問題や今後の期待についてまとめてみます。

表 宇治市内の株式会社運営のグループホーム

法人名	事業所名	定員	特徴
㈱ケアトラスト	メイプルリーフ	6	H12.6 開設 民家型
	メイプルリーフ宇治	24	H14.6 開設 銀行の寮を活用
㈱ヤマト	ニングルの森平尾	9	H12.4 開設 民家型

個人立ち上げ型と異業種参入型

「メイプルリーフ」代表の水島さん夫妻は、共に元体育講師です。特別養護老人ホームでボランティア活動をするなかでグループホームに出会い、自らの手による開設を目標にしてこられました。介護保険の施行をきっかけとして、平



個人立ち上げ型のメイプルリーフ

成10年に本業を退職、株式会社を設立し、自宅でグループホームを開設されました。いわゆる「個人立ち上げ型」ですが、開設までの道のりは山あり谷ありで、志を同じくする銀行や工務店の協力、地域の理解などを得て開設を迎えています。それ故に、多くの人のつながりに支えられた運営を大切にされており、宇治市という地域にこだわっています。

「ニングルの森平尾」は、宇治市の第1号グループホームです。建築資材会社による「異業種参入型」であり、社長の自宅兼会社事務所をグループホームに活用しています。ここでは大胆に、20代の若手職員2名を運営の中心に登用しており、人生経験の豊かな職員とともに運営にあたっています。

株式会社の強さを活かした運営

社会福祉法人は、デイサービスセンターや特養などを運営している場合が多く、福祉の総合事業所として経営面のスケールメリットを備えています。また、職員面でも層の厚さがあります。一方、株式会社は経営面でも職員確保の面でも、全く一からのスタートであり、はじめからハンディを負っているといえます。

しかし見方を変えると、株式会社は生き残っていくために、常に利用者ニーズへの対応が求められることから、競争を自らの発展のエネルギーに変える力があります。



異業種参入型のニングルの森平尾



銀行の寮を活用したグループホーム

例えば、「メイプルリーフ宇治」では銀行の寮をグループホームに活用しており、融資を受ける銀行から事業の堅実性が評価されています。

社会福祉法人はこれまで措置委託(行政からの委託業務)に守られてきたことから、介護保険における選択契約と利用者本位のサービス転換にとまどっています。このことから、株式会社はその強さを活かしながら、新規参入のハンディを乗り越えていくことが求められています。

収益性の向上とサービスの質確保

株式会社によるグループホームでは、収益性向上のための規模の確保が課題となっています。

「ニングルの森」では、経営を安定させるためにも定員50名への拡張をめざしています。規模の拡大とあわせて、サービスの質の向上をめざすことが必要不可欠ですが、若い職員が中心的な役割を担っていることから、全体を見渡し、サービスの質の向上やサービスの改善を図る経験豊かな職員(スーパーバイザー)の確保が課題となっています。

競争の中で選ばれるグループホームをめざした挑戦

利用料(家賃、食費、光熱水費、日用品費)は、宇治市の社会福祉法人のグループホームでは月95,000円前後、株式会社のグループホームでは120,000～150,000円と大きな差があります。いずれにしても、介護保険の自己負担を



グループホームの様子

含めた20万円弱の支出は大きなものです。利用者や家族は慎重にグループホームを選択する傾向にあり、最近では何件も見学してから決定される方が多いそうです。

実際に、定員割れを生じているグループホームも出始めており、介護保険も第2期に入る中で競争に基づくサービスの質確保が問われています。新規参入の株式会社やNPOでは、そのハンディを乗り越えながら、選ばれるグループホームをめざした挑戦が続いています。

メイプルリーのホームページと連絡先

<http://www.geocities.co.jp/SweetHome-Green/5682/index.html>, TEL0774-32-5053

ニングルの森平尾の連絡先 TEL0774-33-1882

<お知らせ>

○前号でご紹介したアルパック公開シンポジウム「関西を元気にするまちづくり」の内容がホームページでご覧いただけます。

URL <http://www.arpak.co.jp/whats.htm>

<編集局から>

○新年度を迎え、読者の皆さんの住所、所属部署等の変更がありましたら、同封の宛先確認ハガキでご連絡下さい。

きんきょう

〔取締役会長／三輪 泰司〕

世界の人々の連帯と協働—山紫水明を次の世代へ

「第3回世界水フォーラム」が、3月16日から23日まで、琵琶湖・淀川流域をむすんで開催されました。フォーラムのニュースによりますと、参加者は101ヶ国と9地域、24,050人、初めの子の3倍に達したそうです。

パーティを含めて5日しか参加できませんでしたが、沢山の感動と触発を頂きました。

広がり繋がる輪

このフォーラムのことを初めて知ったのは3年前でした。1997年12月、「京都議定書」を採択した気候変動枠組条約第3回締約国会議＝COP3の後、1998年から委員長を仰せ付けていました京都商工会議所世界環境都市特別委員会では、2002年の地球サミット（UNCED）の京都開催を検討しましたが、南アフリカ・ヨハネスブルグに決まり、昨年8月、「リオ＋10」が

開催されましたことは、ご承知の通りです。

2000年になり、任期が翌年秋まで延びるようでしたが、委員長の職務を果たさねばと、少し勉強をしておきました。

1977年、国連水会議での「1980年を“国際水供給と衛生の10年”とする」決議以来、リオ・サミットのアジェンダ21「淡水資源の質及び供給の保護」から1996年に専門家らによる世界水会議（World Water Council＝WWC）設立。WWCの提唱でフォーラムが3年毎に開催されることになり、第1回は1997年、モロッコのマラケシュ、第2回は2000年、オランダのハーグで開かれました。

2000年6月28日、第6回委員会で、京都へ誘致しようと提案しました。委員会のご賛同を得て常議員会へ建議し、京都府・京都市とともに運動を始めました。

“水”のことなら琵琶湖から大阪湾まで、淀川流域を結んで、とあいなりました。

主要テーマ

水と貧困	水と都市	水とエネルギー
水と平和（水を通じた紛争解決）	水供給、衛生及び水質汚染	水と文化多様性
水とガバナンス（賢明な水統治）	水と自然、環境	地下水
統合的流域及び水資源管理	農業、食料と水	水と情報
水と食料、環境	水と教育、能力開発	水施設への資金調達
水と気候変動	洪水	水と交通

メジャーグループ

ユース世界水フォーラム	科学技術パネル	ジェンダーパネル
世界子ども水フォーラム	CEO（最高経営責任者）パネル	水援助パートナーパネル
水ジャーナリストパネル	ユニオンパネル	

トピックス

ダムと持続可能な開発	官民の連携	
------------	-------	--

特別なプログラム

水と国会議員	世界水アセスメントプログラム	水と命、医療
水行動計画書	「水と食と農」大臣会議	

地域の日

アフリカの日	アジア・太平洋の日	中近東・地中海の日
アメリカ諸国の日	ヨーロッパの日	

2001年に入り、7月にはフォーラムの尾田栄章事務局長をお招きして、会議所の議員に、理念・内容・日程など、お話しして頂きました。次はこちらから出かけて行く番になりまして、10月、市民ネットワークの発足シンポジウムにお呼び頂きました。なんと言ってもカギは、市民参加の広がりです。

2002年、レイチェル・カーソン女史の「沈黙の春」から40年、ローマクラブの「成長の限界」から30年、美しい地球への思いは、「水の声」プロジェクトは、世界から1万を越えるこえが寄せられてきましたように、第3回世界水フォーラムへ、参加する会議からひとりひとりが創る会議へ、壮大な輪に繋がってきました。

議論から行動へ

「組み合わせテーマ」38、分科会351、100の新しいコミットメントを決めたと報告されていますが、京都・大阪・天津の会議場での分だけではないかと思えます。元々、参加費が高い(通して5万円)という批判もあり、NPOが自前で場所を用意し、自主的に開いた集会有りませぬ。京都の市民ネットワークがコーディネートしたシンポジウムだけでも31あります。

フォーラム事務局もインターネットで、ヴァーチャル・フォーラムのウェブを開いて討論への参加を勧めていました。結局、全参加者の正確な数は分かりませぬ。

フォーラムはシンポジウムの大連合、一大コラボレーションのステージです。内容も少し記録しておかねばなりません。ファイナル・プログラムから、主要テーマを記しておきます。

NPOの主催には楽しいプログラムがあります。京都の市民ネットワークがコーディネートした「市民のひろば」には、「上総堀りて井戸

を掘ろう」とか「全日本河童サミット」とか、面白そうなタイトルが並んでいました。

3月16日、開会式に続いて皇太子殿下が「舟運」について記念講演をされたのも画期的でしたが、イラク戦争のニュースが入って、緊迫した空気もありました。

確かに“水”と人間の関わりは広く、深く、永いと実感しました。そして、大連合の果たす役割は図りしれないことも。特筆したいのは、自主・自発の市民NPOが猛烈な勢いで成長していることです。

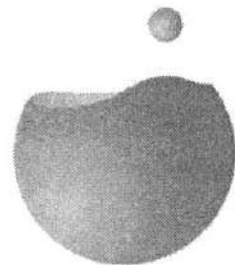
それに対して意外であったのは、企業経営者と、専門外と思ひ込んでいるらしい大学の先生方の参加が少ないことでした。これは考えものです。

次世代へつなぐ

委員長職は1年前に終わりました。若いリーダーにつないで行くのが私のお勤めです。

尾田栄章事務局長は、フォーラム準備のニュース・レターに、毎号、自作の俳句をしるしておられました。3月7日付・第120号は桃の節句でした。「初孫に 受けつがれたる 雛かな」

次のフォーラムは、次世代に受けついで頂きたいと願っております。



World Water Council
3rd World Water Forum

街あそび「なにわ探検クルーズ」

〔代表取締役社長／金井 萬造〕

おおさか街遊びキャンペーンの期間(12/1～4/6)を終えた次の日に、日本観光研究学会主催によるキャンペーンメニューでもあった市内49の橋を約80分でまわる川クルーズに参加した。

落語家の桂きん太郎さんの見事な語りで大阪の川の歴史と橋、水門が面白く理解できた。利用した船は、平底の船で80人まで乗船できる。船の屋根は地盤沈下などで橋と水面の隙間が狭いため上下や開閉できる構造で、当日は気候もよくて開放され、川と一体になり気持ちがよかった。乗客は船べりから乗出して写真撮影に熱中したり、船内でなごやかに語らい、飲み物を交わしながら盛り上がっていく。

クルーズは3コースが開発され、川の環状線コース(湊町船着場発着)、川のゆめ咲線コース(ユニバーサルスタジオ連携:ユニバーサルシティポート発・湊町船着場着)、追加オプションのコースで、定員は40人(最大56人)、所要時間は80分から120分など一日3回の運航が今後も予定されている。料金は一人2,500円、貸し切りで10万円となっている。コースもの以外に飲食をプラスした貸切プランも見かけた。

これから夏の季節では水質や臭いはいかなど課題もありそうだ。私たちは川の環状線コースに参加した。午後3時出発で、東横堀川水門が午前9時から午後5時までの利用制限がある

ため、大川の桜並木観賞もそこそこに湊町船着場に戻ったが、利用が多い中で制限時間の延長の課題もクリアしたいと思った。

川の環状線コースは道頓堀川～木津川～堂島川～大川～土佐堀川～東土佐堀川～道頓堀川を一巡する。見所は、まず道頓堀川水門で、水害防止が目的で1m30cmの水位差に対応し24時間稼働している。通行料金は無料だが手続きは3日前に必要で、通行する度に必要とのこと。次に大阪ドームが見えてくる。川沿いの街並みの歴史や物語も紹介されていく。さらに進むと木津川と安治川の交差するあたり、川口の居留地跡があり、明治時代の開港時に教会や欧米の貿易商社が立地した地域で、これを通り過ぎると堂島川の近代から現代の都心である中之島地域が見えてくる。国際会議場やリーガロイヤルホテル、日本銀行、大阪市庁舎、中央公会堂あたりは川辺の緑と都市デザインのみごとな空間を味わうことができる。

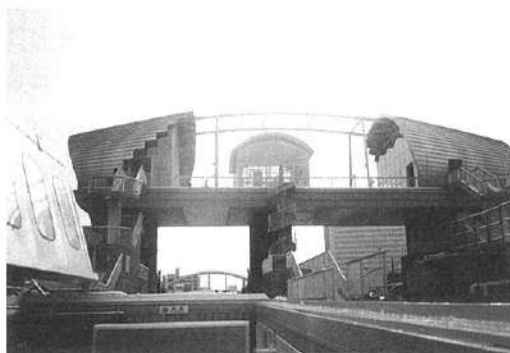
中之島公園あたりは、大川の桜並木が満開で華やかな都市の環境の景観を構成してまさに圧巻である。しかし、水門の午後5時の開閉条件で近よることができず、大川遊覧をパスして東横堀川を南下した。ここは高速道路の橋脚、川沿い施設の混在や裏側景観などとなり、機能純化などで魅力的な都市空間づくりの課題を感じた。最後の部分は、道頓堀川を西進し、国立文楽劇場や道頓堀地区の賑やかな都心のダウンタ



湊町船着場(湊町ガーデンプレイス)から出航する船



落語家の桂きん太郎さんの見事な語り



24時間稼働している道頓堀川水門の景色はすばらしい。各立地するお店も川辺を向いて整備され、船上の人と地上、橋上の人との交歓もまた楽しい一時である。夜になるとネオンやライトアップなどすばらしい眺望となる。

クルーズで勉強できることとして、水門や開門などの水位の制御や船の運行などを実地で多彩に役割を学べることは、家族ずれでクルーズすることの楽しさや大阪のまちと川のかかわり、川からの街の眺めなど目的を持たずとも、自然に優しく理解させてくれることなどがあげられる。

ホームレスの方々の生活状況も一部で見える。なにわの街の特徴である川を活かしたクルーズ事業の今後の着実な発展と、「ほな乗ってみよか」と都市民、観光客が身近に感じられる更なる演出やソフトな企画や工夫が追加され、都市の魅力向上に繋がっていくことを心から願う。



道頓堀地区の賑やかな都心のダウンタウン風景

尼崎21世紀の森づくり協議会でワークショップ・フォーラムを開催しました

【大阪事務所／絹原 一寛】

尼崎に森をつくる

「尼崎」と「森」という組み合わせを耳にされると、思わず耳を疑われるかもしれませんが、尼崎市の臨海地域（約1,000ha）を環境共生の都市に再生する計画「尼崎21世紀の森構想」の実現に向けた動きがすでに始まっています。森構想を推進する中核組織として「尼崎21世紀の森づくり協議会」が平成14年8月に設立され、昨年度は主に森づくりの輪を市民の間に広げるためにワークショップとフォーラムを実施しました（<http://web.pref.hyogo.jp/morikoso/>に森構想の内容や協議会の取り組みが紹介されています）。

森づくりへの参加の呼びかけ

昨年12月から計4回開催したワークショップでは、5つのグループに分かれ森づくりへの提案をまとめていきました。人気投票で1位になったグループは「森に住もう！プロジェクト」と題し、2010年の尼崎の森での1週間の生活を提案するなど、各グループからユニークな提案が出されました。

3月には、森づくりの取り組みを広くアピールする機会として、「尼崎21世紀の森フォーラム」を開催しました。ここではワークショップの成果の発表、構想や協議会の紹介の他に、他地域の参考になる事例も紹介して頂き、午後からの現地見学会では森づくりの舞台を体験しました。

100年かけて成長する森

森づくりに参加している方々は「自分が行ってきた活動を森づくりに活かしたい」「尼崎のイメージを変え、後世に伝えていきたい」など、非常に高い意識を持っておられます。森づくりとは、実はこうした人々が（森の生長と共に）成長していくことに他ならないと感じます。そ



それを妨げる制約（場所、機会、人材、金銭などの問題）をほぐしていくことが、これからの森づくり協議会活動の課題になるのではないのでしょうか。

「手の知」を通して～麴づくり職人の「技」～ [名古屋事務所／河野 麻利]

昨年1年間、私は白壁アカデミアの講座「手の知」の中で、様々なモノづくりの現場を訪れ、何人かの職人の方々に出会いました。そして職人の経験談を通して、「技」を構成する、素材+道具+人の手の働き及び、その手に宿る知の働きについて学ぶことができました。

今回は、日本酒の造り酒屋である金虎酒蔵を訪れた際に聞いた、麴づくりの「技」についてご紹介します。

40年培った麴づくりの「技」

昔から日本酒造りは、一麴、二モト（酒母）、三つくり（醪）と言われており、麴づくりはおいしい日本酒を造るための最も重要な過程であると言えます。

麴を造るにはまず、蒸した米に2種類の麴菌をふりかけます。1種類の菌の特徴に偏ってしまわないよう、ここでは2種類の菌を使用するそうです。菌をかけたものを麻の布で包み、24時間高温の部屋に保存します。その後外に出され、さらに24時間冷却されると麴が出来上がります。

この間の温度管理が職人の「技」の見せどころです。温度は一定に保てばいいわけではなく、また日によって、温度や湿度が違うため、夜中にも何度もチェックしなければなりません。大きな工場ではコンピューター制御で、温度が上がってしまうと、風を送って冷ますような温度調節をしているそうです。最近ではその技術も進歩したといいますが、「それではいい麴にはならない、手づくりに勝るものは無い」と職人は言われます。麴と相談しながら調節しているそうですが、毎年やっても答えは簡単に決まるわけではなく、40年培って身につけた感覚で麴を大切に「育てて」いるそうです。

職人の手に宿る「技」

ここ金虎酒蔵の麴づくり職人は、22歳から麴づくりを始め、もう40年のキャリアの持ち主です。今回の麴づくりの職人だけでなく、「手の知」を通して出会った職人全てに共通していることですが、様々な苦労を経験し、知を働かせ、時間をかけて「技」は磨き上げられるということを知りました。またどの「技」を見ても、職人自らの造るものに対する愛情が感じられました。いいものを造りたいという職人の気持ちが、手を通して造るものに伝わるのだと思います。

社会に出て一年、自分の力の無さに悩んだこともありましたが、気持ちを込めることは私のような人間でも、誰にでもできることです。そんな気持ちを常に持ち続け、これから経験を積んでいきたいと思っています。



製麴途中の様子



「現場主義の知的生産法」

- 関満博著
- ちくま新書

蘇州工業園區の視察

本年の3月末、中国の江南地域にある蘇州を訪れた。歴史的な旧市街地とともに、26,000haという途方もなく大きくて近代的な蘇州工業園区(工業団地)を視察した。すでに1049社(日系企業は122社)が進出しているとのことである。中国の特別開発区のひとつ、蘇州工業園区の説明を流暢な日本語で聞きながら、関満博氏のことを考えていた。

関満博氏の調査活動

今回紹介する著者、関満博氏は、<現場には常に「発見」がある>が持論。すでに、国内5000社、海外1000社に及ぶ工場調査の実績を有している。まさに、「現場主義を地で行く研究者」「歩く経済学者」である。

関氏は、中国長江周辺から中国東北部、朝鮮半島、モンゴル、極東ロシアなど北東アジア地域に深い関心を持って、精力的に海外調査を展開している。「中国長江下流域の発展戦略」「上

紹介者／大阪事務所 杉原 五郎

海の産業発展と日本企業」などの著作がある。

国内でも、地道な地域調査を数多く積み重ねてきた。テーマは、テクノポリス、サイエンスパーク、企業城下町など多岐に及び、全国のさまざまな地域に足を運んで、地域のキーパーソンと深い人脈を築いている。

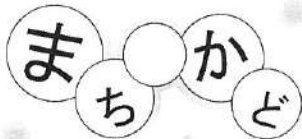
「現場」の重要性と「知的生産法」

関氏は、本書の中で、「現場」の重要性を説いている。「なぜ、現場なのか」と問い、「それは新たな発見がある、ということにつきる」と自答している。「現場の空気」に触れることなく、調査票を埋めるだけの紋切り型の調査を行っている例があると、若い研究者やシンクタンクに苦言を呈している。

同時に、豊かなフィールド調査に裏打ちされた著者のノウハウ(「知的生産法」)を披瀝している。調査の準備、現地でのヒアリングの方法、調査結果のまとめ方、報告書や本の書き方、地元の人々とのつきあい方など、具体事例を交えて実にわかりやすく述べている。

現場を大切にすべての人々に一読を

本書は、地域産業や中小企業をテーマとする研究者だけでなく、地域の分析やまちづくりを仕事とするシンクタンク、コンサルタントにとって、間違いなく必読の書と言ってよい。現場と地域を大切にすべての人々に一読をお薦めしたい。



名古屋の粋と文化を味わう会

〔名古屋事務所／福井 守〕

昨年、12月7日(土)、小雨が降りしきる中、第1回『名古屋の粋と文化を味わう会』が開かれました。

粋と文化

都心の歴史・文化の保存・継承と活性化に造詣の深い瀬口哲夫氏(名古屋市立大学教授)の発案と、有志の参画によりこの会が発足しました。瀬口氏は、都心に遺る木造建築の料亭等に注目し、市民の利用機会をつくることで、歴史・文化の再発見と情報発信を市民レベルで繰り広げていくことが、まちのエネルギーにもなると考えています。そのため、この会では食事だけではなく、瀬口氏による建物の特徴の解説、ご主人によるまちの歴史や逸話の紹介、食後のまち歩きなどで構成されています。

まちなかの喧騒を忘れる料亭「蔦茂」

第1回は、一般の参加者と有志をあわせ18名での開催となりました。「蔦茂」は、住吉町(現、中区栄3丁目)で大正2(1913)年に旅館としてスタート、当時の建物は第二次大戦で焼失し、今あるのは昭和32年建築のものです。この住吉町は、芸者、置屋、料亭の三業のまちとして江戸時代より発展し、戦後は近くに進駐軍の

住宅が130戸も並ぶ「アメリカ村」として利用されたこともあり、歓楽街として栄えたようです。

風情ただよう「松の間」

今回の部屋は、蔦茂でも最も格式の高い場所です。部屋に面して二つの坪庭があり、庭に水の有無を付けることで温度差をつくり、部屋に風が流れるという工夫が施されています。また、戦後建築としては建具などにも遊び心がみられるとのこと。なお、ここで食事中に料理長の鳥居氏より本日の献立について解説して頂いています。

まち歩き

深田氏は地元の有志とともに、栄〇丁目という形式的町名ではなく、住吉町、八百屋町、南呉服町と由緒ある名称を使い続ける活動を展開しています。名古屋の商業中心地の一つ「栄」のまちで、そうした話を伺いながら寺社や長屋といった異次元を感じさせるまちを雨の中を足早に通り返りました。目に映るもの全てが参加者にとって新鮮なものであり、歴史と文化が息づくまちを心に焼き付けていたようです。

この会は、今年の3月に第2回を開催し、5～6月頃に第3回目を開催する予定です。



蔦茂外観



長屋・路地

アルパック (株)地域計画建築研究所

・本 社

URL:<http://www.arpak.co.jp> E-mail:info@arpak.co.jp

京都事務所 〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町 82/TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

・大阪事務所 〒540-0001 大阪市中央区城見 1-4-70・住友生命OBP プラザビル 15F/TEL(06)6942-5732 FAX(06)6941-7478

・名古屋事務所 〒460-0008 名古屋市中区栄 3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル 13F/TEL(052)265-2401 FAX(052)249-3925

・東京事務所 〒186-0001 東京都国立市北 1-1-17・田畑ビル 3F/TEL(042)501-2531 FAX(042)501-3024 分室/TEL(03)3226-9130

・九州事務所 (株)よかネット 〒810-0001 福岡市中央区天神 1-15-35・ホンダハビエ 5F/TEL(092)731-7671 FAX(092)731-7673